

第7回 やめて！！家族同意だけの 「脳死」・臓器摘出！市民の会 結成3周年記念集会

尊厳死法制化について考える

いき
ひと息ひと呼吸に生きぬくかわいて…



2014年2月22日

エルおおさか

人工呼吸器をつけた子の親の会〈バクバクの会〉
大塚孝司

本日の資料

- 資料ー1 レジюме(スライド)
- 資料ー2 尊厳死法案(問題点の整理)
- 資料ー3 尊厳死法(第2案(未定稿))
- 資料ー4 尊厳死法(第1案・第2案対照表)
- 資料ー5 小松美彦氏資料
- 資料ー6 バクバクっ子のいのちの宣言

「終末医療」関連ニュース(1)

◆麻生財務相発言

- 「死にたいと思っても生きられる。政府の金で（高額医療を）やっているとすると寝覚めが悪い。さっさと死ねるようにしてもらうなど、いろいろと考えないと解決しない」

(2013/01/21)

◆人工透析の中止

- 人工透析が必要な患者が、回復の見込みがない終末期を迎えた場合、本人や家族が透析を望まなければ、中止も選択肢とする提言案を日本透析医学会がまとめた。

(2013/01/27)

「終末医療」関連ニュース(2)

◆麻生発言をタブーにしない

- ……必要なのは「終末期医療や介護のケアはどうあるべきか」という本質的な議論だと思うからだ。

…「さっさと死にたい」と思う人は増えているのかもしれない。

ただし気をつけたい。それが、いつの間にか「延命はすべきでない」という空気を醸し、さらに「病気でも生きたい」がタブーになることを。

…

(朝日新聞社説余滴2013/01/31)

「終末医療」関連ニュース(3)

◆高齢者「延命より苦痛緩和を」…終末期調査

- 終末期の延命措置を望む高齢者は16年前に比べて減る一方、苦痛を和らげる措置を望む高齢者は増えているとする調査結果を、東京都健康長寿医療センターなどの研究グループがまとめた。

…日本老年医学会で発表した。…外来患者を対象に終末期医療について意識調査…968人が答え、平均年齢は77歳…

「がんなどで余命3か月とされた場合でも徹底した延命措置を望む」と答えた人は前回の9.3%から3.9%に減った。

「重い認知症や脳卒中で食べられず、寝たきりで意思表示も出来ない場合」の胃ろうなどの人工的な栄養補給については、「何も望まない」と答えた人は40%から47%に増えていた。

(2013年6月6日10時13分 読売新聞)

尊厳死法案の問題点

1. 患者の意思の尊重・自己決定(第一・二条)
2. 「終末期」の定義(第五条)
3. 「終末期」の判定(第一・六条)
4. 医師の免責(第一・九条)
5. 書面での意思表示(第七・八条)
6. 啓発及び知識の普及(第三・十一條)
7. 法案の拡大(第十二条・附則)
8. 見えない圧力(第十三条)

「日本安楽死協会」から 「日本尊厳死協会」に改称

- 「消極的安楽死の思想を普及させるためには、『**どちらの表現が正しいか誤りか**』ではなく、その時その時の内外の情勢を考えて**運動に有利な表現**を採用すればよいわけであります。今回の改称はあくまで今日の情勢への対応に過ぎません」

(太田典礼 1983. 6. 28)

参考資料: 大谷いづみ氏 立命館大学 産業社会学部 講演資料から

- 尊厳死という言葉によって議論が阻害されるなら、協会名を変えることもやぶさかではない。

(尊厳死協会理事長 岩尾總一郎 2014. 2. 5)

尊厳死に関する検討PT(自民党)

安楽死

- **積極的安楽死**

医師が致死薬を直接投与して死に至らせる

- **消極的安楽死＝尊厳死**

人工呼吸器、経管栄養などの“延命治療”の不開始や中止によって死を迎えさせる

- **医師による自殺幫助**

医師が致死薬を処方し服用の判断を患者に委ねる

安楽死×尊厳死

◆安楽死の動機

- 肉体的ないし精神的な苦痛の除去

◆尊厳死の動機

- 人工呼吸器やチューブにつながれた闘病状態を否定的にとらえる



◆医療の継続よりも死を優先

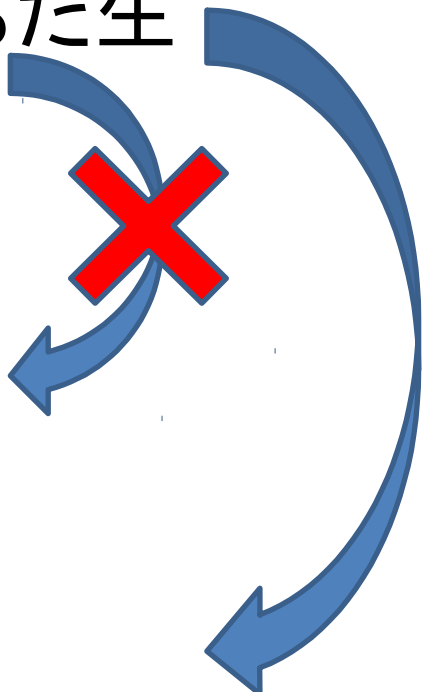
尊厳の無い苦痛に満ちた生よりは、
尊厳のある安らかな死を選ぶ

参考文献『政権力の歴史—脳死・尊厳死—人間の尊厳をめぐる』(青土社)

自己決定権

『自己決定』  美意識の喚起・共感

◆思考のねじれ

- 尊厳の無い苦痛に満ちた生
 - 尊厳のある安らかな死
 - 尊厳のある安らかな生
- 

死ぬ権利から死ぬ義務へ

- 国の医療費の削減政策
- 健康に務めることは国民の責務(義務)
- 個人が望む死に方(死ぬ権利)

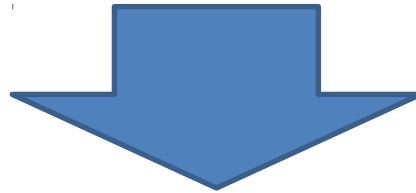
社会からの無言の圧力

不要な人間(死ぬ義務)



おわりに

- 「死にたい人のため」の法整備
- 「死なせるための」法整備
- 「生きさせるか死の中へ廃棄するか」
- 「生きるに値するもの」「生きるに値しないもの」



- どんな状態であっても生きられる社会
- 「存在の価値」「ただ生きている事の価値」